

// 巻 頭 言 //

日本ライトハウス理事長
岩橋明子

今年の夏8月21日から31日まで世界盲人連合（WBU）の総会がカナダのトロントで開催されたので、日本代表の一人として出席した。1984年に世界盲人福祉協議会（WCWB）と世界盲人連盟（IFB）が一つに統合されてできた団体であるが、加盟国も次第に増え、今回は135ヶ国から800名以上の代表やガイド、オブザーバーなどが参加して大変盛会であった。WBUになってからは4回目の総会であったが、毎回参加者は多くなっている。オリンピックではないが参加することに意義があるという感じで、開催地もすべての国の人が入国できる場所というのが条件となっているし、全加盟国から少なくとも夫々一名は出席できるように援助対策もなされている。つまり開発途上国に対しては会議期間中の滞在費・食費はWBU持ち、旅費は他の加盟各国からの協力を仰いでいる。先進国と見做されている国々は近隣の途上国の代表の旅費を一人でも二人でも可能な範囲で負担するわけで、ヨーロッパなどはアフリカやアジアの国々に対してかなりの援助をしたようである。WBU自身は会費収入のみで他に寄付金はほとんど無いので全くの貧乏である。活動費を確保するためにと前会長ブライス氏が基金作りを呼び掛け、アメリカを中心にライオンズ・クラブや企業などからの寄付があったらしいが基金となるにはほど遠い。とにかくいろいろな国から不自由な人達が集まるので、カナダ側で多数のボランティアが準備されてはいたがなかなか大変であった。今回目立ったのは盲導犬を連れて参加した人が多いことで、入国に際しての検疫が特別な計らいで簡略化されたため20頭以上はいたようであった。最初の日に一頭だけ一声吠えた犬がいたがあとは全く静かで、何頭か集まってもお互いに全然気にもとめていないようで良く馴れられているのに感心した。犬種はゴールデン、ラブラドル、シェパード、ボクサー、雑種と様々で楽しかった。

WCWBの時期から1・2回を除いて総会や役員会にはほとんど出席しているが、視覚障害者の教育・福祉の考え方は当然のことながら時代と共に流れが変わってきた。ところがこの2・3年は何だかまた少し逆戻りしているような

気がする。障害者の人権や自立に目が向けられ、いわゆるセルフ・ヘルプ運動が盛んになってきたのは1964年の総会のときであった。また、統合教育が英米以外の国々にも導入され始めたのも60年代の初めである。以来、社会参加、一般企業への雇用の拡大は歩行訓練や生活訓練を含むリハビリテーションの普及と共に世界的な運動目標となり、1981年の国際障害者年を迎えたわけである。ところが雇用に関しては、特にヨーロッパを中心とした先進工業国において一般企業への就職が難しくなってきた。工場での単純作業はすべて自動化されてよほど高度の職能を持たなければ視覚障害者の入り込む余地がないという発言が目立ち始め、授産所の内容を改善して見直すべきであるとかソ連をはじめとする東欧諸国の盲人工場を見習うべきなどという意見が多くなってきた。また、いわゆるC B Rが注目され華々しく紹介されたのも70年代であったが、これについても80年代後半ごろから問題点が指摘され始めた。つまり指導員の質の低下とそれに伴う訓練のレベル・ダウン、先進国から導入されたアイデアが十分消化されないままに発展途上国の農村や僻地に入り伝統的な習慣や文化と軋轢を生ずるなど…。再び訓練施設の必要性を強く主張する声も出ている。重複障害を持つ盲児の増加は世界的な傾向であるが、統合教育が主体となっている国々では一般校の教師が盲児教育の十分な知識がないために単一障害の盲児でさえ扱い兼ねている現状で、早急な対応が望まれている。そしてまた、他の障害者との協力や調整の方向に向かいかけていた活動が近年Uターン現象を見せている。アトランタのパラリンピックで視覚障害者への対応に問題が多かったとか、視覚障害の特殊性が他と一緒にでは無視されるとか、W B Uとしては独自の運動に切り変えるらしい。

こうした流れをどう見るべきなのだろうか。大きく動いた振り子が戻ってきてやがて落ち着くべきところに戻るのか、やっぱりと言う事で保守的な立場が強くなるのか、何十年経っても視覚障害者の状況は変わらず同じような議論が続けられている。アフリカなどの数多くの国からの情報やニーズが表に出てきたことで、今まで以上に状況の深刻さを感じずにいられない。国や地域間の隔差は広がる一方で、一体我々はどうしたら良いのか考えれば考えるほど気の重いことである。せめて戦火や人工的な原因で失明する人達がこれ以上増えないように、世界中の行政責任を持つ人達の賢明な勇気ある判断を祈るのみである。